

ぐるり日本一周、歩いて8300km 64歳、永年の夢を実現

日本列島を歩く。尋常な旅ではない。

年をまたいで足かけ9カ月、8300キロを踏みしめた一人旅である。道々の美しい日本の風景、人との出会い、自分との対話……。

国立東京工業高専名誉教授

吉村靖夫

Yasuo Yoshimura

(1938年中央大学理工学部卒)

【東日本の旅】

私が徒歩旅行を始めたのは昨年の5月3日でした。40年余り勤めた国立東京工業高専を退職してから約1カ月後です。退職する数年前からどこか遠い所まで歩いて旅行して見たいと考えていました。

そして最終的には、学生時代に友人達と山登りしながら訪れたことのある北海道・宗谷岬まで歩く事に決心しました。突然そんな事を言うとは反対されるので、1年くらい前から家内にはそれとなくほめかかしていましたが。

04年5・3

起点はお江戸日本橋

出発点は古今東西、日本の主要道路の起点である東京・日本橋です。朝、9時過ぎ、友人3人と出発しました。荷物は余分な物は持たないように工夫しましたが、それでも約10キロになりました。下着類各2着、雨具、ノートパソコン、デジカメ、歩度計、地図等です。帽子に縫い付けた携帯ラジオは毎日の情報収集に役立ちました。コンビニや100円ショップは全国各地にもあり、下着類、弁当、酒、電池など歩行時に必要なものが手軽に安く手に入り大助かりでした。

靴は出発前に八王子のスポーツ用品店で買いました。ミズノのウォーキングシューズで1万5千円弱でした。駄目になった時の予備として2足買いました。ところが、この靴が期待以上に頑張り1足だけで北海道一周、本州日本海側、九州の南端・鹿児島まで耐えてくれました。毎晩、宿に入る時、靴に「今日も一日ご苦労さん」とねぎらいました。

仙台……定のママがタコに

初めの数日、北上なので富士山は遠く背後に見えていました。毎日、1日約30キロのペースで、太平洋沿岸の茨城、福島、宮城、岩手県

太平洋沿岸を北上しました。リアス式海岸で有名な三陸海岸の景色には飽きがありませんが、上り下りと曲がりの多い道の連続であまり距離が稼げませんでした。東京を出発して1週間位は足のママの痛さに苦しみました。何でこんな事までして歩くのか？(そんな義務はないのですが)と自問自答しながら毎日歩きました。が仙台辺りからは急に楽になりました。ママがタコに変身していくのです。ママを克服すれば後は楽です。いくら歩いてもママはもうでなくなりませんでした。1カ月後の6月4日、青森県下北半島の北端・大間崎に到着、そこから函館行きフェリーに乗りました。東京を出る時、65キロだった体重は函館では58キロにまで減っていました。

函館を発つてからは雄大な内浦湾を右に見ながら平地を北上しますが、長万部から洞爺迄は一変して険しい山道となります。約200年前、かの伊能忠敬はこの地形の測量で苦労したという記録が残っていますが、実際に礼文華峠付近を歩いてみてその険しさを実感しました。

よしむら・やすお

1940年新潟県生まれ。中央大学大学院工学研究科精密機械工学修士課程修了。85年—04年国立東京工業高専教授。同高専名誉教授。工学博士。現在、(株)日本時計学会事務局長。著書に『機械設計法』（森北出版）、『工業力学』（コロナ社）など。



ここから旅立ち。東京・日本橋で=04年5月3日

円でした。

網走↓稚内↓7・14宗谷岬 右にオホーツク海、左は放牧場

釧路からは釧網線に沿って釧路湿原を北上し網走に出ました。初め、道東を海岸線に沿って歩く予定だったのですが、道東だと宿の確保が難しい事が分かり変更しました。なにしろ、歩きの旅は1日、せいぜい30

6月中旬、苦小牧か

ら日高本線と並行して襟裳岬に向かって歩きました。丁度、有名な日高昆布の収穫の始まり時期で地元の人達が沢山海に出ていました。襟裳岬付近は広い台地となつています。岬の3方が海、海、海でその広大な眺めは印象的でした。牧場が続く大地の道をゆつくり歩くだけで至福の至りです。また、岬で食べたえびラーメンの味も忘れられません。確か650

キロ程度ですから、途中に町や村が無ければ宿もあるはずが無く、お手上げになるからです。釧路から釧路湿原、野上峠、弟子屈、小清水原生花園と続く道は北海道の広さを感じさせますが、歩道が少ないので歩きにくい道でした。

ところで、道路上に設置されている距離標識は相当いい加減です。1、2キロの狂いはざらです。あれは歩く人のことを全く無視した表示です。

さらに網走から稚内まではオホーツク海岸に沿い約300kmあります。右はオホーツク海、道はまっすぐ、左側は放牧場の連続です。若い人たちがたくさんオートバイや自転車です。ツーリングを楽しんでいました。でも、歩いている人はほとんど見かけません。昔あつた鉄道も廃線となり線路だけが草ぼうぼうの中に残っているのを見るのは寂しいものです。やっぱり、車社会になつてしまった、と思ひ知らされました。7月14日、目的地・宗谷岬に着きました。7月14日、目的地・宗谷岬に着きました。昔、学生時代、初めて来た時はあんなに感動したのにならうだろうか？

と不思議に思いました。

それは、今回の東京から稚内迄の旅が、“線的”であつたからでしょう。毎日歩いていると自然や言葉や人を含めた環境の落差が小さいので目的地に着いたからと言って特に感激が得られないのです。しかし、飛行機や自動車等での“点的”旅では得られないような途中の環境の変化がよく体験できるわけです。

東京を出る時は宗谷岬まで歩くのが目的だったので、宗谷岬に着いた頃は、さらに日本海側を歩いて上越市（新潟県・出身地）まで歩くか、それとも汽車に乗って東京にすぐ戻るか少し迷いました。でも、エイ！ヤ！で日本海に出る道に一步踏み出した途端迷いは消えました。なお、稚内のユースホステルでは中央大学の後輩、佐藤勝さん（1968年法学部卒）と出逢いました。佐藤さんはオートバイで旅行中でした。その後親交があつて、今年2月下旬、静岡県由井から中伊豆まで同行しました。

その後、北海道の西海岸を毎日夕日を見ながら歩きました。旧友も3

えばそれ迄ですが、私は自分自身の体で実感したかったです。実際に全国を一周してみても日本の海岸線の変化を体で確認する事が出来ました。

【西日本の旅】

暫く八王子の自宅で休んだ後、9月16日上越市から徒歩旅行を再開しました。どこまで行けるか分からないが、やれるだけやってみようと気



「サインして」と集まってきた子供たち＝山口県・黄波戸駅待合室

楽な気持ちで歩き始めました。

9・16上越から再び西へ

歩き始めて2日目に名勝「親不知（おやしらず）」に着きました。昔、母子がこの海岸を旅する時、荒波にさらわれ親子がばらばらになってしまったという難所です。今でも海岸際を国道8号が走ります。薄暗いトンネルの中は歩道が無く怖いものなん

の。一度カーブで郵便車に接触されそうになりました。向こうもまさか人が歩いてるなんて思いもしないから路肩ぎりぎりに走って来たのです。瞬間、「危ない！」と声を上げてしまいました。その後、富山、金沢、敦賀、鳥取と順調に進みました。9月下旬は台風シーズンでよく風雨の中を歩きま

したが余り気になりませんでした。

途中、由良川（京都府）沿いに、森鷗外の「山椒大夫」に出てくる「安寿と厨子王」で有名な国分寺に豪雨の中立ち寄りました。弟の厨子王がかくまわれたと言うお寺です。小学生の頃、教室で先生がこの本を読んでくれ可愛そうで皆、泣きながら聞いた記憶が残っています。

山口県の長門市近くに黄波土（きわど）という小さな駅があります。10月15日、長門市の宿に戻るため、夕暮れ時、駅の待合室でぼーっとしていたら、小学生の子供たちが少しずつ集まって来ました。子供たちから、名前は？ どこから来たの？ 何歳？ サインして……等と聞かれています。お互い打ち解けてきてとても楽しいひと時でした。

子供のおばあちゃんがお茶も持ってきてくれました。うまかった！ 1人で旅をしているとこんなことでものすごく嬉しくなるものです。旅が終ってすぐ手紙と写真を子供達に送りました。すごく喜んでいて、おばあちゃんから返事をもらいました。

10・23新潟中越地震を佐賀・有田市で知った

佐賀県の有田市で新潟の中越地震を知りました。やっとつながった電話で、実家も親戚も無事だった事を知りましたが、長岡付近には知人も多いのでその後気の重い日が続きました。

島原半島も通りました。15年前に普賢岳が噴火し多くの方が被災しました。でも今、島原市から八代に向かうフェリーから見た山々は穏やかで、エッ、ここに火砕流押しよせた!? と信じられない光景でした。このフェリーの中で中越地震で車に閉じ込められた母子の中、男の子が救出される様子をテレビで見ても涙が出ました。

11月、沖縄 米軍基地沿いを歩きつつ

11月上旬、鹿児島からフェリーで沖縄本島に渡り、平和祈念公園のある南端・糸満市から北端・辺戸岬まで4日半掛けて歩きました。沖縄は60年前全土が戦禍に見舞われまし



夢の成就…友人と多摩川を渡った=05年3月3日

沖繩を歩き終わってからはひたすら北上しました。宮崎の日南海岸の素晴らしい景色も思い出です。九州から本州に戻り、山陽道か

ミが鳴いていました。珊瑚の海はまさに紺碧です。こんな海を見ながら毎日歩くというのは贅沢だなーと思いました。国頭村（くにがみそん）の辺土名の民宿では、ハブ酒を「ご馳走」になりましたが、昨日捕まえたというハブの丸焼きを、「どうぞ」といわれた時は何でも食べる私でも駄目でした。

た訳ですが、いくつもの米軍基地を見ると、沖縄は今でも戦争の犠牲になっっている事を実感しました。また、糸満市郊外のサトウキビ畑の中を歩きながら、終戦直前、沢山の住民が隠れ家を失って海岸の方に逃げ惑う姿が想像されて暗い気持ちになりました。沖縄は、明るい海や空と抱き合わせに、一般住民を巻き込んだ暗い過去があり、ここを旅する人は誰も複雑な気分になるはずで

既に12月でしたが沖縄はまだ、セ

日本列島の最西南端は波照間島です。歩いて一周4時間位でしたが村の中を歩いていても殆ど人に会いません。時間が止まったかのような雰囲気でした。島の最南端に立った時は、ああ、これで日本列島を縦断したんだと実感しました。信じられないかも知れませんが、こうやって歩いてでも来れるのだから、日本はやはり小さい国だなあと感じました。

ら紀伊半島に抜けた後、四国に渡りました。新居浜の民宿「別子」ではおかみさんが私の破れた地図を修復してくれました。毎日の経路を赤ペんで塗りつぶした大切な全国地図です。また、愛媛県西予市の漁村ではいとこの知人の斉藤達文さん一家の暖かい歓迎を受けました。無農薬みかん栽培をやっている方ですが、初めの頃は周りに理解されずに苦労したという事でした。

高知市には2月1日に着きましたが、18年ぶりとかの雪と出くわしました。安岐市の阪神タイガースのキャンプ地の前を通った時は大好きな阪神の今年の優勝を祈願しました。9月29日阪神が優勝したのもそのお陰です!?

05年3・3旅の終わり “点的旅行”にはない何か

こうして、最後に東海道を歩きました。浜松付近に来て富士山を前方に見た時は、出発時を思い出しました。何しろ、出発時、富士山はいつも背後にあったのですから。そして、今春3月3日、出発地・日本橋に到

着しました。多摩川を友人と渡る時、ああ、とうとう東京に戻って来たんだなと少しセンチになりました。こうして、正味日数270日、総歩行距離数約8300キロの長い旅も終わりました。

四国では街道沿いに札所が沢山あるので立ち寄り八十八箇所巡りも少しだけ経験しました。嬉しかったのは多くの若者、特に若い女性が数人でお遍路さんをしているのに出会った事です。見知らぬ土地を歩くだけで、きつと「何かを感じた」に違いないと思います。

旅行中、延べ12人の知人と平均2、3日一緒に歩きましたが、皆さん、異口同音に「歩く旅行は楽しい!」と言ってくれました。それくらい、車や飛行機を使った“点的”旅行では味わえない自然や人との出会いを“線の”旅行で経験できるとい事です。学生の皆さんも春・夏休み等をうまく使い、半月位の徒歩旅行をぜひ経験して欲しいと思います。歩くという動作は単純ですが、人それぞれに貴重な経験をする事間違いありません。